川崎医療福祉学会誌　Vol. 34　No. 1　2024　35－45

原　著

地域の児童館を利用している子どもの社会性に関する調査研究
―A 市と B 市の児童館を利用している子どもの利用者評価に関する調査より―

八重樫牧子[*1]　井上信次[*2]　直島克樹[*3]　三好年江[*4]　泉宗孝[*2]

要　　約

本研究の目的は，A 市と B 市の児童館を利用している子ども（主に小学3年生～6年生，289人）の利用者評価に関する質問紙調査から，満足度や児童館利用効果（子どもの社会性）に与える要因について明らかにするとともに．子どもの相談状況を明らかにすることによって児童館の相談援助についても検討することである．その結果，15年前に実施した調査と同様に本調査でも，外遊びが好きな子どもは協調性が高く，創造性や満足度も高い傾向にあることから，子どもにとって外遊びが重要であることが再確認された．児童館によく来る子どもは，職員によく相談しており，協調性や創造性が高くなっていることが明らかになった．今後，児童館の相談援助などのソーシャルワークの充実が求められる．地域差については，A 市の方が児童館をよく利用しているが，満足度や創造性は B 市の方が高くなっていた．A 市は B 市に比べ児童館の数が多いが，不安についても A 市の方が高いことから，相談支援などのソーシャルワークをより充実していくことが求められる．

1．緒言

都市化，核家族化，少子化そして共働き家庭の一般化により，子どもを取り巻く家庭や地域社会が大きく変化し，家庭・地域社会の子育て機能や教育力が低下している．その結果，子どもや子育て家庭の問題（不登校，いじめ，非行，子どもの貧困，児童虐待など）が，深刻な社会問題となっている．このような子どもや家庭の問題を解決するために，子どもの育ち，親の育ち，子育てに対する社会的支援の必要性が増大し，すべての子どもや子育て家庭を対象とした総合的・計画的な子育て支援が実施されている．

2023（令和5）年4月には，1994（平成6）年に批准された国際法である児童の権利に関する条約の国内法である「こども基本法」[†1)]が施行された．こどもの視点に立ってこどもの権利と福祉を守り，こどものある家庭における子育てを支援し，こども政策を強力に推進する国の機関である「こども家庭庁」もスタートした．同年12月22日には，「こども基本法」に基づき，こども政策を総合的に推進するために政府全体のこども施策の基本的な方針等を定める「こども大綱」[1)]や「こどもの居場所づくりに関する指針」[2)]が閣議決定された．

児童館は，児童福祉法成立以来，すべての子どもの育ち（健全育成）を保障し，子育て家庭を支援してきた．今後も，児童館は地域の子育ち・子育て支援[†2)]の居場所の一つとして重要な役割が期待されている．2016（平成28）年6月には，児童福祉法の理念が70年ぶりに改正され，児童の権利に関する条約の精神にのっとり，すべての子どもの権利が保障されることが明確になった．このような状況の中で，2011（平成23）年3月に出された「児童館のガイド

*1 福山市立大学　名誉教授
*2 新見公立大学　健康科学部　地域福祉学科
*3 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科
*4 就実短期大学　幼児教育学科
（連絡先）八重樫牧子　〒700-0080　岡山市北区津島福居1-9-20-1
E-mail : hamanami@po8.oninet.ne.jp

ライン」が見直され，2018（平成30）年10月に「児童館ガイドライン」[3]の改正が行われた．いくつかの改正のポイントがあるが，児童館の特性が，①拠点性，②多機能性，③地域性の3点に整理されたこと，児童館の職員に対し，配慮を必要とする子どもへの適切な対応が求められたことに着目したい．改正された「児童館ガイドライン」[3]から，①児童館は，家庭や学校ではない第三の居場所である地域に子どものための拠点（居場所）を提供し，子どもの遊びや生活にかかわる様々な課題に多機能的に対応し，地域の中で子どもが健やかに育つための環境づくりを進めることが重要であること，②子どもたちが直面している生活問題に対応するために，子どもの生活の安心・安定を図るための支援，すなわち相談支援などのソーシャルワークが求められていることが確認できる．

児童館の目的は，児童福祉法第40条および児童福祉施設の設備及び運営に関する基準第39条において，遊びを通し，児童の健康の増進や情操を豊かにすること，すなわち児童の自主性，社会性や創造性を高めることによって，地域の健全育成活動の助長を図るとこと規定されている．このように児童館は，遊びを通して社会性等を高めることを目的にしているが，児童館活動と子どもの遊びや社会性の関連性から児童館利用効果について検討した研究は少ない．児童館を利用することが子どもにどのような影響を与えているかについては，次のような先行研究がある．児童育成研究会[4]は，小学生と中学生を対象に児童館・図書館利用の実態やその利用効果について調査研究を行い，児童館や図書館の利用体験が子どもの心身の発達にどのような効果があるか検討を行い，多様な遊びの広がり，友人関係の広がり，運動・スポーツや芸術的表見活動に対する親和性，規律の遵守の面で児童館利用体験の有効性を明らかにしている．また，児童館の現状と可能性に関する調査研究会[5]は，小学2年生の子ども，小学生や幼児を持つ保護者を対象に調査研究を行い，児童館を利用している子どもと利用していない子どもとでは遊びの内容や生活の関心事に異なった特徴があり，児童館を利用する子どもはコミュニケーション志向，自己実現志向であり，自己肯定感が高いことを示唆している．八重樫[6]は，B市の小学３年生917人を対象に子どもの遊びや生活に関する質問紙調査を実施した結果，児童館を利用する子どもは共感性が高く，遊び友達も多いこと，そして，外遊びが好きな子どもは，よく遊び，遊び友達も多く，自主性や共感性が高いことを明らかにしている．さらに，八重樫[7]は，B市の児童館を利用している子ども398人を対象に，児童館の利用状況や子どもの遊びが子どもの社会性の発達に与える影響について質問紙調査を実施している．子どもの社会性に関する項目を児童館利用効果とし，カテゴリカル因子分析を行った結果，協調性と創造性の2因子を抽出している．児童館利用頻度と社会性（協調性・創造性）との間には直接的な関連はなかった．しかし，友達がいるから児童館に行く子どもは，協調性が高く，児童館の利用頻度も高いことや，外遊びが協調性や創造性に影響を与えていることを明らかにしている．このB市の児童館を利用している子どもの質問紙調査が実施されてから，すでに15年が経過している．

そこで，本稿では，A市とB市の児童館を利用している子ども（主に小学3年生～6年生）を対象に，15年前に実施された質問紙調査[7]と同様の質問紙調査を実施し，子どもの遊びや児童館の利用状況が，子どもの社会性や児童館活動の満足度に与える影響について検討する．また，先に「児童館ガイドライン」の改正ポイントの一つとして指摘したように，児童館の職員に対しては，子どもたちが直面している生活問題に対応するために，子どもの生活の安心・安定を図るための支援，すなわち相談支援などのソーシャルワークを行うことが求められているので，児童館の子どもへの相談状況についても質問し，分析・検討を行う．

２．方法

２．１　調査の対象・方法・内容

調査対象は，A市の児童館を利用している子ども655人，B市の児童館を利用している子ども205人，合計860人であり，有効回答数は，A市194人（有効回答率29.6％），B市95人（有効回答率46.3％），合計289人（有効回答率33.6％）である．なお，A市には23か所の児童館（児童センター含む），B市には6か所の児童館（児童センター含む）がある．調査期間は2022年9月～10月，調査方法は郵送法による質問紙調査である．

調査内容は，以下のとおりである．①児童の属性に関する項目は，学年，年齢，性別，家族構成，家族の就労状況，学校から帰った時に家にいる人の6項目である．②遊びなどの状況に関する項目は，遊ぶ人数，遊ぶ人，遊び場，友達と遊ぶ日数，遊びの種類，外遊びが好きか，塾・習い事の頻度，放課後児童クラブ利用頻度の8項目である．遊ぶ人数は「1.1人（自分だけ），2.2～4人，3.5～9人，4.10人以上」の順序尺度，遊ぶ日数は「1.まったくない，2.1週間に1日～2日，3.1週間に3日～4日，4.ほとんど毎日」の順序尺度を用いた．塾・習い事の頻度は「1.週5

～7回，2. 週3～5回，3. 週1～2回，4. 通っていない」の順序尺度，放課後児童クラブ利用頻度は「1. 週5回（毎日），2. 週3～4回，3. 週1～2回，4. 通っていない」の順序尺度を用いた．③児童館の利用状況に関する項目は，利用頻度，児童館で遊ぶ人，児童館に来る理由，相談，相談内容，満足度の6項目である．児童館の利用頻度は「1. 開いているときは毎日，2. 1週間に4～5回，3. 1週間に2～3回，4. 1週間に1回，5. 2週間に1回，6. 1か月に1回」の順序尺度，相談については「1. よくする，2. 時々する，3. あまりしない，4. 全くしない，5. わからない」の順序尺度を用いた．満足度は「0」（まったく満足していない）から「10」（十分に満足している）の数字を1つ選択することとした．④社会性に関する項目は，八重樫[7]が使用した子どもの社会性に関する21項目である．⑤不安に関する項目は，内閣府が実施した「平成2年度子供の生活状況調査」の報告書[8]を参考に抽出した3項目である．社会性と不安に関する項目については「1. よくある，2. ときどきある，3. ほとんどない，4. まったくない，5. わからない」の順序尺度を用いた．本調査質問項目は合計44項目である．

２．２　分析方法

就労状況などの属性，遊びの状況（遊ぶ友達，日数，遊びの種類，遊ぶ場所など），児童館の利用状況（利用頻度，遊ぶ人，利用する理由．相談・内容など）について性別・地区別に検討するためにクロス集計による Fisher-Freeman-Halton の正確確率検定を行った．児童館利用頻度と属性・遊びの状況・相談の関連性を検討するためにクロス集計を行い，Fisher-Freeman-Halton の正確確率検定を行った．満足度については，0～10の回答した数字に0～10点を附置し点数化を行った．八重樫[7]は子どもの社会性に関する項目のカテゴリカル因子分析を行った結果，協調性と創造性の2因子を抽出しているので，これを用いた．協調性・創造性・不安については「よくある」に4点，「ときどきある」に3点，「ほとんどない」に2点，「まったくない」に1点を附置し，それぞれの合計得点を算出した．これらの点数化を行った項目のシャピロ・ウイルク検定を行った結果，有意確率が0.01以下であり，データーは正規分布をしていなかったので，満足度・社会性（協調性・創造性）・不安と属性・遊びの状況・児童館等の利用状況との関連性を検討するために Mann-Whitney 検定や Kruskal-Wallis の検定を行った．また，分析には IBM SPSS Statistics version29，SPSS Exact Tests を使用した．

３．結果

３．１　対象者の主な属性

分析対象者289人の平均年齢（±標準偏差）は9.89（±1.22）歳であった．性別からみた平均年齢（±標準偏差）は，男子102人（35.3%）は9.97（±1.41）歳，女子182人（63.0%）は9.97（±1.11）歳，その他5人（1.7%）は9.40（±1.14）歳であった．学年別にみると，低学年（小学2年生～小学4年生）149人（51.6%），高学年140人（小学5年生～中学1年生）（48.4%）であった．性別，学年別とも Fisher-Freeman-Halton の正確確率検定の結果，性別については p=0.621，学年については p=0.213で有意差はなかった．

家族形態については，核家族206人（71.3%），三世代家族37人（12.8%），ひとり親家族（ひとり親三世代家族含む）39人（13.5%），その他7人（2.4%）であり，核家族が多くなっていた．A 市と B 市について Fisher-Freeman-Halton の正確確率検定を行った結果，p=0.687で地域差は認められなかった．

親の就労状況については，251人（86.9%）の父親が就労しており，A 市と B 市について Fisher-Freeman-Halton の正確確率検定を行った結果，p=0.712で地域差はなかった．しかし，母親については226人（78.2%）が就労していたが，A 市は167人（86.1%）が就労していたのに対し，B 市は59人（62.1%）であり，同様の検定を行った結果，p=0.000，0.1%水準で A 市に比べ B 市は有意に少なくなっていた．

３．２　遊びなどの状況

平日に友達を遊ぶ日数については「1週間に1日～2日」と答えた子どもが113人（40.2%）と多くなっていた．「まったくない」と答えた子どもも71人（25.3%）いた．地域差については，Fisher-Freeman-Halton の正確確率 p=0.712で地域差はなかった．土曜日に友達と遊ぶ日数については「ほとんど毎週」と答えた子どもが85人（30.5%）と多くなっていたが，A 市は65人（34.6%）であるのに対し，B 市は20人（22.0%）であり，同様の検定を行った結果，p=0.002，1%水準で A 市の方が多くなっていた．日曜日に友達と遊ぶ日数については，「まったくない」が96人（34.5%）と多く同様の検定を行った結果，p=0.314で地域差は認められなかった．

遊ぶ人数については，約7割の子どもが「2～4人」と答えており，女子（113人，73.5%）が男子（57人，57.0%）より遊ぶ人数が多くなっていた．しかし「10人以上」と答えた子どもの場合は，男子（13.0%）の方が女子（6.6%）より多くなっていた（5%水準，p=0.036）．地域差はなかった（p=0.145）．

塾や習い事に行っている子どもは216人（75.5%），

塾や習い事に通っていない子どもは70人（24.5％）と，塾や習い事に通っている子どもが多く，地域差はなかった（p=0.238）．塾や習い事に通っている子どもの内，「週1～2回」と答えた子どもが121人（42.3％）と多くなっていた．

遊びの種類としては，ゲーム（ファミコンなど）が176人（62.0％），スポーツが171人（60.2％），友達とのおしゃべりが138人（48.6％）と多くなっていた．ゲーム（ファミコン）は男子（78.4％）の方が女子（52.7％）に比べ，0.1％水準（p=0.000）で多くなっていた．おしゃべりについては女子（57.1％）の方が男子（33.3％）に比べ，0.1％水準（p=0.000）で多くなっていた．スポーツについては性別による有意確率はp=0.120で有意差は無かった．遊びの種類の地域差については全ての遊びの有意確率はp>0.05で有意差は認められなかった．

遊ぶ場所は，自分の家が162人（57.0％），児童館・児童センター154人（54.2％），家の近くの公園等147人（51.8％），友達の家133人（46.8％）が多かったが，性別や地域差については，いずれも有意確率はp>0.05で有意差は認められなかった．学校で遊ぶと答えた子どもは78人（27.5％）と多くなっていたが，男子（35.3％）の方が女子（23.1％）に比べ，5％水準（p=0.037）で有意に多くなっていた．

なお，外遊びについては，「とても好き」と答えた子どもが119人（41.9％），「好き」と答えた100人（35.2％）と合わせると，219人（77.1％）の子どもが肯定的に答えていた．性別や地域別にみると正確確率はいずれもp>0.05で有意差は認められなかった．

３．３　児童館の利用状況

児童館の利用頻度については，「1ヶ月に1回以下」と答えた子どもが約38％と多く，次に「1週間に1～3回」が約30％と多くなっていた．性別にみると正確有意確率p=0.558で性別による違いはなかった．しかし，「1週間に4回以上」と答えた子どもは，A市は33人（17.2％）であるのに対しB市は6人（6.5％）で，5％水準（p=0.015）でA市の利用頻度が多くなっていた．

児童館で一緒に遊ぶ人は，同じクラスの友達と答えた子どもが172人（59.5％）と多くなっていたが，A市（68.0％）の方がB市（42.1％）に比べて0.1％水準（p=0.000）で多くなっていた．違う学年の友達についてもA市（22.7％）の方がB市（7.4％）に比べ0.1％水準（p=0.001）で多かった．しかし，きょうだいについてはB市（24.2％）の方がA市（12.4％）に比べ0.1％水準（p=0.001）で，違う学校の友達についてはB市（35.8％）の方がA市（7.7％）に比べ5％水準（p=0.017）で，親についてはB市（22.1％）の方がA市（7.7％）に比べ0.1％水準（p=0.001）で，そして1人（自分だけ）についてもB市（16.8％）の方がA市（7.2％）に比べ5％水準（p=0.022）で多くなっていた．

児童館を利用する理由については，好きな遊びができるからが115人（39.8％），友達がいるから106人（36.7％）と積極的な理由が多くなっていた．なんとなく78人（27.0％）や他に遊ぶところがないから60人（20.8％）など消極的な理由も次に多くなっていた．これらの項目について地域差をみると，いずれも正確有意確率がp>0.05で有意差は認められなかった．しかし，他に遊ぶところがないと答えた子どもはA市（25.8％）の方がB市（10.5％）に比べ1％水準（p=0.003）で多く，地域差が認められた．

表1は児童館の職員[†3)]に相談する頻度を示してい

表１　性別・地区別児童館の職員に相談する頻度

			よくする	時々する	あまりしない	全くしない	合計	Fisher の正確確率	有意差
性別	男	度数	3	10	23	52	88	0.432	ns
		性別の％	3.4	11.4	26.1	59.1	100.0		
		調整済み残差	1.2	0.9	0.3	−1.1			
	女	度数	2	13	40	108	163		
		性別の％	1.2	8.0	24.5	66.3	100.0		
		調整済み残差	−1.2	−0.9	−0.3	1.1			
	合計	度数	5	23	63	160	251		
		性別の％	2.0	9.2	25.1	63.7	100.0		
地区別	A市	度数	5	14	34	116	169	0.036	＊
		地区の％	3.0	8.3	20.1	68.6	100.0		
		調整済み残差	1.6	−0.6	−2.4	2.0			
	B市	度数	0	9	29	48	86		
		地区の％	0.0	10.5	33.7	55.8	100.0		
		調整済み残差	−1.6	0.6	2.4	−2.0			
	合計	度数	5	23	63	164	255		
		地区の％	2.0	9.0	24.7	64.3	100.0		

注）Fisher−Freeman−Halton の正確確率検定　　＊：p <0.05　ns：有意差無

る．相談を「全くしない」が約64％と多くなっていた．次に「あまりしないが」が約25％であった．性別にみると正確確率p=0.432で有意差は無かった．地区別にみると相談を「全くしない」がＡ市（68.6％）の方がＢ市（55.8％）に比べ5％水準（p=0.036）で多くなっていた．

相談内容については，「遊びのこと」（32人，11.3％）が多くなっていた．相談人数は少ないが，「学校（勉強）のこと」（9人，3.2％），「家族のこと」（8人，2.8％），「友達とのつきあいのこと」（7人，2.5％）．「自分自身のこと」（6人，2.1％）と答えていたことに留意したい．いずれも項目も性別や地域別の正確確率はp>0.05で有意差は認められなかった．

表2は，児童館利用頻度と性別・学年・地区・遊ぶ人数・外遊び・相談の関連性を示したものである．学年は「小学校2年生～5年生」を低学年，「小学校6年生～中学校1年生」を高学年とした．遊ぶ人数は「1人（自分だけ）」「2～4人」「5人以上」の3群に分けた．外遊びは「とても好き」「好き」「好きではない」の3群に分けた．相談については「する」「あまりしない」「全くしない」の3群に分けた．児童館利用頻度については，高い群（1週間に1回以上）と低い群（2週間に1回以下の群）に分けた．その結果，児童館利用頻度と性別・学年・外遊びとの関連性はなかったが，地区と遊ぶ人数と平日遊ぶ日数については有意差が認められた．Ｂ市よりＡ市ついては1％水準（p=0.007）で，5人以上の遊び人数は1％水準（p=0.008）で，平日に週3日以上遊ぶと答えた子どもは5％水準（p=0.030）で児童館利用頻度の高い群の方が高くなっていた．相談については，相談すると答えた方が，児童館利用頻度が高い傾向があった（p=0.092）．

３．４　満足度・社会性（協調性と創造性）・不安との関連

表3は，満足度・社会性（協調性と創造性）・不安と属性・環境の関連性を検討するために，Mann-Whitney 検定の結果を示したものである．表4は，満足度・社会性（協調性と創造性）・不安と遊びの状況・相談の関連性を検討するために，Kruskal-Wallis の検定の結果を示したものである．

満足度は高学年より低学年（p<0.05），Ａ市よりＢ市（p<0.01）が高くなっていた．外遊びが「とても好き」と答えた子どもの方が「好き」と答えた子どもより満足度が高い傾向が認められた（0.05<p<0.1）．協調性については外遊びが「とても好き」と答えた子どもの方が「好きではない」と答えた子どもより高くなっていた（p<0.01）．また，児童館の職員に相談を「する」と答えた子どもは，「全くしない」と答えた子どもより高くなっていた（p<0.05）．創造性については．Ａ市よりＢ市が，外遊びが「好きではない」と答えた子どもより「とても好き」と答えた子どもの方が高い傾向があった（0.05<p<0.1）．また，相談を「全くしない」と答えた子どもに比べ，「する」と答えた子どもや「あまりしない」と答えた子どもの方が高くなっていた（p<0.01）．不安についてはＢ市よりＡ市の方が高くなっていた（p<0.05）．性別，放課後児童クラブ（学童保育），児童館利用頻度，遊ぶ人数，平日の遊ぶ日数については，いずれも有意差は認められなかった．

４．考察

４．１　子どもの遊びの状況―外遊びの重要性―

遊ぶ日数については，平日の遊び日数が「全くない」と答えた子どもが25.3％，土曜日では23.7％，日曜日では34.5％になっていた．特に土曜日については地域差があり，Ａ市はＢ市に比べ「ほとんど毎週」と答えた子どもが多く，遊ぶ日数が多いことが推察された．Ｂ市で実施した15年前の質問紙調査[7]では，平日の遊び日数が「全くない」と答えた子どもは20.5％であったが，本調査ではＢ市は31.2％と多くなっていた．ただし，本調査を実施したのはコロナ渦でもあり，遊ぶことが制限されていたことも影響していると推察される．

遊びの種類については，ゲーム（ファミコンなど）の室内遊びや，スポーツなどの屋外遊びがいずれも約6割をしめていた．また，遊ぶ場所は自分の家（57.0％），児童館・児童センター（54.2％），家の近くの公園など（51.8％），友達の家（46.9％）が多くなっていた．15年前の質問紙調査[7]でも家の近くの公園などでスポーツなど体を動かす遊びをする子どもが約半数，友達の家などでゲームをする子どももほぼ半数であった．ちなみに，平成26年度全国家庭児童調査[9]では，「小学校5～6年生」の遊ぶ場所で最も多かったのは，友達の家（70.6％），自宅（61.5％），公園（56.3％）であった．

また，15年前の質問紙調査[7]では，外遊びがとても好きな男子・女子は，協調性や創造性の得点が有意に高かった．また，家や近くの公園空き地などで遊ぶ男子・女子は協調性の得点が高く，外遊びであるスポーツなど体を動かす遊びする男子や，探検をする女子は，協調性や創造性の得点が高くなっていた．本調査でも，外遊びが好きな子どもは協調性が高く，創造性や満足度も高い傾向にあることから，子どもにとって外遊びが重要であることが再確認された．かつて子どもの遊びの隆盛期には，子どもは

表２　児童館利用頻度と性別・学年・地区・遊ぶ人数・遊ぶ日数・外遊び・相談の関連性

			1週間に1回以上	2週間に1回以下	合計	Fisher-Freeman-Haltonの正確確率検定	有意差
性別	男	度数	40	59	99	0.866	ns
		%	40.4	59.6	100.0		
		調整済み残差	-0.6	0.6			
	女	度数	80	101	181		
		%	44.2	55.8	100.0		
		調整済み残差	0.6	-0.6			
	その他（答えたくない）	度数	2	3	5		
		%	40.0	60.0	100.0		
		調整済み残差	-0.1	0.1			
	合計	度数	122	163	285		
		%	42.8	57.2	100.0		
学年	低学年	度数	64	83	147	0.812	ns
		%	43.5	53.5	100.0		
		調整済み残差	0.3	-0.3			
	高学年	度数	58	80	138		
		%	42.0	58.0	100.0		
		調整済み残差	-0.3	0.3			
	合計	度数	122	163	285		
		%	42.8	57.2	100.0		
地区	A市	度数	93	99	192	0.007	**
		%	48.4	51.6	100.0		
		調整済み残差	2.8	-2.8			
	B市	度数	29	64	93		
		%	31.2	68.8	100.0		
		調整済み残差	-2.8	2.8			
	合計	度数	122	163	285		
		%	42.8	57.2	100.0		
遊ぶ人数	1人（自分だけ）	度数	8	15	23	0.008	**
		%	34.8	65.2	100.0		
		調整済み残差	-0.8	0.8			
	2～4人	度数	71	118	189		
		%	37.6	62.4	100		
		調整済み残差	-2.4	2.4			
	5人以上	度数	41	29	70		
		%	58.6	41.4	100.0		
		調整済み残差	3.1	-3.1			
	合計	度数	120	162	282		
		%	42.6	57.4	100.0		
平日遊ぶ日数	週3日以上	度数	52	44	96	0.030	*
		%	54.2	45.8	100.0		
		調整済み残差	2.7	-2.7			
	週1～2日	度数	44	69	113		
		%	38.9	61.1	100.0		
		調整済み残差	-1.2	1.2			
	まったくない	度数	24	44	68		
		%	35.3	64.7	100.0		
		調整済み残差	-1.5	1.5			
	合計	度数	120	157	277		
		%	43.3	56.7	100		
外遊び	とても好き	度数	52	65	117	0.370	ns
		%	44.4	55.6	100.0		
		調整済み残差	0.7	-0.7			
	好き	度数	43	56	99		
		%	43.4	56.6	100.0		
		調整済み残差	0.4	-0.4			
	好きではない	度数	15	31	46		
		%	32.6	67.4	100.0		
		調整済み残差	-1.4	1.4			
	合計	度数	110	152	262		
		%	42.0	58.0	100.0		
相談	する	度数	17	12	29	0.092	†
		%	58.6	41.4	100.0		
		調整済み残差	1.9	-1.9			
	あまりしない	度数	29	33	62		
		%	46.8	53.2	100.0		
		調整済み残差	0.8	-0.8			
	全くしない	度数	62	101	163		
		%	38.0	62.0	100.0		
		調整済み残差	-1.9	1.9			
	合計	度数	108	146	254		
		%	42.5	57.5	100.0		

注）クロス集計，Fisher-Freeman-Halton の正確確率検定
**：$p<0.01$，*$p<0.05$，†：$0.05<p<0.1$，ns：有意差無

表３　満足度・社会性（協調性と創造性）・不安と属性・環境の関連

		満足度			第1因子協調性（合計）			第2因子創造性（合計）			不安（合計）		
属性	性別	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
	度数	100	181	281	75	133	208	70	134	204	100	179	279
	平均値	8.44	8.39		40.55	41.02		12.63	13.46		9.45	9.10	
	中央値	9.00	9.00		42.00	43.00		12.00	13.00		10.00	9.00	
	漸近有意確率（両側）	0.93			0.48			0.14			0.26		
	学年	低学年	高学年	合計	低学年	高学年	合計	低学年	高学年	合計	低学年	高学年	合計
	度数	149	137	286	105	105	210	100	104	204	146	138	284
	平均値	8.54	8.11		40.99	40.73		13.39	12.97		9.18	9.39	
	中央値	10.00	9.00		42.00	42.00		13.00	13.00		9.50	10.00	
	漸近有意確率（両側）	0.05*			0.65			0.52			0.63		
	地区	A市	B市	合計	A市	B市	合計	A市	B市	合計	A市	B市	合計
	度数	193	93	286	139	71	210	139	65	204	192	92	284
	平均値	8.15	8.72		40.73	41.11		12.83	13.91		9.64	8.54	
	中央値	9.00	10.00		42.00	43.00		12.00	14.00		10.00	9.00	
	漸近有意確率（両側）	0.01**			0.54			0.07†			0.004**		
環境	学童保育	通っている	通っていない	合計	通っている	通っていない	合計	通っている	通っていない	合計	通っている	通っていない	合計
	度数	44	235	279	33	170	203	29	169	198	43	234	277
	平均値	8.50	8.34		42.00	40.72		14.24	12.93		9.12	9.28	
	中央値	9.50	9.00		43.00	42.00		14.00	13.00		10.00	9.50	
	漸近有意確率（両側）	0.72			0.19			0.12			0.96		
	児童館利用頻度	1週間に1回以上	2週間に1回以下	合計	1週間に1回以上	2週間に1回以下	合計	1週間に1回以上	2週間に1回以下	合計	1週間に1回以上	2週間に1回以下	合計
	度数	121	162	283	94	113	207	92	110	202	120	160	280
	平均値	8.48	8.27		41.77	40.12		13.34	13.02		9.47	9.16	
	中央値	10.00	9.00		43.00	42.00		13.00	13.00		10.00	9.00	
	漸近有意確率（両側）	0.30			0.11			0.54			0.27		

注）Mann-Whitney 検定，＊＊：$p<0.01$，＊：$p<0.05$，†：$0.05<p<0.1$

表４　満足度・社会性（協調性と創造性）・不安と遊び状況・相談の関連

	満足度				第1因子協調性（合計）				第2因子創造性（合計）				不安（合計）			
遊ぶ人数	1人（自分だけ）	2～4人	5人以上	合計	1人（自分だけ）	2～4人	5人以上	合計	1人（自分だけ）	2～4人	5人以上	合計	1人（自分だけ）	2～4人	5人以上	合計
度数	24	190	69	283	16	131	61	208	16	136	50	202	24	189	68	281
平均ランク	165.29	142.61	132.22		100.03	104.87	104.87		111.06	99.58	103.66		148.21	137.68	147.69	
漸近有意確率	0.192				0.953				0.724				0.612			
外遊び	とても好き	好き	好きではない	合計	とても好き	好き	好きではない	合計	とても好き	好き	好きではない	合計	とても好き	好き	好きではない	合計
度数	116	100	47	263	97	70	33	200	88	71	30	189	116	99	46	261
平均ランク	141.13	118.90	137.34		112.44	94.09	79.00		100.42	97.10	74.13		130.42	139.72	113.70	
漸近有意確率	0.064†				0.008**				0.068†				0.149			
ペアごとの比較 調整済み有意確率	好き-とても好き：0.068				好きではない-とても好き：0.012				好きではない-とても好き：0.068							
平日の遊ぶ日数	週3日以上	週1～2日	まったくない	合計	週3日以上	週1～2日	まったくない	合計	週3日以上	週1～2日	まったくない	合計	週3日以上	週1～2日	まったくない	合計
度数	95	113	70	278	76	84	45	205	67	90	43	200	95	114	67	276
平均ランク	131.58	136.12	155.71		110.52	99.38	97.06		104.88	92.68	110.05		137.01	138.92	139.90	
漸近有意確率	0.108				0.369				0.200				0.971			
相談	する	あまりしない	全くしない	合計	する	あまりしない	全くしない	合計	する	あまりしない	全くしない	合計	する	あまりしない	全くしない	合計
度数	29	62	164	255	21	45	121	187	18	50	115	183	28	62	164	254
平均ランク	143.53	138.53	121.27		117.24	105.54	85.67		113.69	105.28	82.83		110.09	131.38	129.01	
漸近有意確率	0.110				0.012*				0.008**				0.397			
ペアごとの比較 調整済み有意確率					全くしない-する：0.040				全くしない-あまりしない：0.036 全くしない-する：0.063							

注）Kruskal-Wallis の検定，＊＊：$p<0.01$，＊：$p<0.05$，†：$0.05<p<0.1$
調整済み有意確率：Bonferroni 訂正により，複数のテストに対して，有意確率の値を調整

戸外で群れをなして遊んでいた．住田[10]はこのような活動的な外遊びを通じて仲間集団が形成され，子どもはこの仲間集団に参加し所属することによって個人化や社会化がなされたと述べている．また，八重樫[6]も，今日，いわゆる「3間の喪失」といわれるように，遊び時間，異年齢の子どもの遊び仲間，外遊びを行う遊び空間が減少し，個人化・室内化した受動的な遊びが多くなってきていると指摘している．今後，児童館活動の中で，社会性（協調性と創造性）を高める外遊びをいかに保障していくことができるかということが課題となってくる．

４．２　児童館の利用状況―遊び支援と居場所づくり―

児童館の利用頻度は，2週間に1回以下が約47％，1週間に1～3回以上が約43％とよく利用する子どもと利用しない子どもに二分化されていた．1週間に4回以上（ほぼ毎日）と答えた子どもは，15年前の質問紙調査[7]では7％であったが，本調査でもＢ市は6.5％でほぼ同じであった．しかし，よく遊ぶ場所として児童館と答えた子どもは，15年前の質問紙調査[7]では35％であったが，本調査では50.5％であり，児童館を利用する子どもが増えていることが推察される．

児童館で一緒に遊ぶ友達は，同じクラスの友達（59.5％）や違うクラスの友達（32.9％）が多くなっていた．平成26年度全国家庭児童調査[9]でも，普段一緒によく遊ぶ友達として「小学校5～6年生」は，同じクラス（85.0％），違うクラス（51.2％）をあげていた．本調査では地域差が認められ，同じクラスの友達・違う学年の友達と遊ぶと答えた子どもはＡ市が多かったが，きょうだいや親と答えた子どもはＢ市の方が多くなっていた．Ｂ市の児童館を利用する子どもがきょうだいや親などの家族と一緒に児童館を利用しているのは，①母親の就労状況をみると，就労していない母親がＢ市の方が多いこと，②Ａ市と比べ児童館数が少なく，身近に児童館がないことが影響しているのではないかと推察される．

児童館利用頻度と性別・学年・外遊びとの関連性は認められなかったが，地区，遊ぶ人数，平日の遊ぶ日数については有意差が認められた．Ｂ市よりＡ市の方が児童館の利用頻度が高くなっていた．Ｂ市には6か所しか児童館がないが，Ａ市には23か所の児童館があり児童館を利用しやすいためだと思われる．5人以上の友達と遊び，平日の遊び日数が週3日以上と答えた子どもの児童館利用頻度も高くなっていた．たくさんの子どもと一緒に平日よく遊ぶ子どもは児童館をよく利用しているといえる．今日，地域において自然発生的に仲間集団が形成されることは難しくなってきているので，児童館は仲間集団の形成に重要な意味をもっている．15年前の質問紙調査結果から八重樫[7]が指摘しているように，本調査からも平日に仲間集団で豊かな遊びが展開できるようなプログラム開発を行っていくことが課題であることが明らかになった．ただし，児童健全育成推進財団[11]は『改定版　児童館』において，児童館は気分や体調によっては何もしないでのんびり過ごすことができる居場所でもあると指摘している．本調査においても児童館を利用する理由として，「好きな遊びができる」以外に「なんとなく」という理由をあげている子どももいたので，「何もしなくてもいい」「ホッとできる」居場所づくりも重要な課題となってくる．

４．３　児童館における相談支援などのソーシャルワークの充実

本調査では，児童館の相談支援を明らかにするために，相談頻度や相談内容について調べた．その結果，「全くしない」と答えた子どもが64.1％と約半数強をしめており，特にＡ市は68.6％とＢ市の55.8％に比べ多くなっていた．しかし，何らかの相談をしている人が35.7％いることに着目したい．相談内容をみると，遊びのこと（11.3％）が多く，その他に学校（勉強）のこと（3.2％），家族のこと（2.8％），友達つきあいのこと（2.5％）があった．「児童館の運営及び活動内容等の状況に関する調査研究」[12]によると，児童館の職員が対応した相談（日常の悩みの聞き取り等を含む）件数（令和２年度実績）のうち，「小学生以下」からの相談は50.8％であった．子どもからの（児童館の職員への）主な相談内容（複数回答）で多かったのは，「友人とのつきあいに関すること」55.2％であった．次いで「学校に関すること」41.7％，「遊びに関すること」40.0％，「家族に関すること」31.9％であった．

本調査では，児童館をよく利用する子どもは，職員に相談しており，協調性や創造性が高くなっていた．「改訂児童館ガイドブック」[3]において指摘されているように，児童館の職員は，子どもたちが直面している生活問題に対応するために，子どもの生活の安心・安定を図るための支援，すなわちソーシャルワークが行うことが求められている．今日，児童館の相談支援などのソーシャルワークの充実が重要な課題となっている．八重樫[13,14]が指摘しているように，児童館の相談支援は，子どもの生活の安定を図るための支援機能や問題の早期発見・支援機能（予防的機能）としてとらえることができる．所[15]は，児童館での「相談活動」は面接相談や訪問相談よりも，「自由遊びのなかでの会話やおしゃべりを通し

て行われる」かなり広義の活動として捉えられていると述べている．また，児童健全育成推進財団[11]は『改訂　児童館』において，児童館での子どもからの相談は，必ずしも構造化された面接の体をとらずに，生活場面や活動場面において唐突に話し始められ，表情や態度・行動で問題を表出させることもあると記述している．したがって，児童館の職員は日頃から遊びなどを通し，子どもとの信頼関係を形成し，子どもとの日常的なかかわりの中から子どものニーズに気づくことが重要になってくる．

地域差についてみると，A 市の児童館の方がよく利用されているが，満足度はB 市の方が高く，創造性もB 市の方が高い傾向がみられた．また，子どもの不安はA 市の方が高くなっていたが，相談を「全くしない」と答えた子どもも A 市の方が多くなっていた．A 市はB 市に比べ児童館の数が多くよく利用されているが，今後，A 市の児童館は相談支援をより充実していくことが課題である．児童館はすべての子どもが利用できる児童福祉施設であり，学校や家庭以外の地域で子どもが安心して過ごすことのできる第三の居場所（サードプレイス）である．児童館を利用する子どもにとって児童館の職員は，親や学校の先生以外の身近で気軽に相談できる大人であることが期待されている．児童館が子どもにとって身近な相談窓口になるためには，地域の実情や特性を踏まえた相談支援などのソーシャルワークのプログラム開発が求められているといえる．

倫理的配慮

質問調査用紙に調査協力有無の質問項目を設け，協力すると回答した子どもを本調査に同意を得たものとした．調査は無記名式で実施し，結果の集計はすべて統計的に処理し，個人が特定されることのないよう個人情報の保護を遵守した．本研究に関連して，開示すべき COI はない．本研究は，新見公立大学研究倫理審委員会の承認を得ている（承認番号255）．

謝　辞

本調査にご回答くださいましたA 市とB 市の児童館の利用者の皆様，調査の実施にご協力くださいました支援者の皆様に感謝申し上げます．

付　記

令和2年度～令和5年度科研・基盤研究（C）（一般）・課題番号20K02298「地域の児童館の子育ち・子育て支援におけるソーシャルワークに関する実証的研究」（研究代表者：八重樫牧子，研究分担者：井上信次，直島克樹，三好年江，泉宗孝）の研究成果の一部として，2023年10月15日に日本社会福祉学会第74回全国大会秋期大会（武蔵野大学武蔵野キャンパス）において，「地域の児童館を利用している子どもの社会性に関する調査研究―A 市とB 市の児童館を利用している子どもの利用者評価に関する調査より―」について口頭発表を行った．本論文は，この発表を一部修正加筆したものである．

注

†1）1994年に児童の権利に関する条約を批准した際，日本政府は現行法で子どもの権利は守られているとの立場を取り，国内法の整備は行わなかった[16]．2016年の児童福祉法改正で，その理念に「児童の権利に関する条約の精神にのっとり」や，「児童が権利の主体である」ことが明記され，児童の権利に関する条約との整合性が図られたことは画期的なことであった．しかし，児童福祉法は福祉分野の法律であり，教育や司法の分野に及ぶものではなく，子どもの権利侵害に関する裁判においても児童の権利に関する条約を基盤とした判例はなく，国内法が定められていないことの影響が大きいといわれていた[16]．子どもをめぐる問題を抜本的に解決し，養育，教育，保健，医療，福祉等の子どもの権利施策を幅広く，整合性をもって実施するには，子どもの権利に関する国の基本方針，理念及び子どもの権利保障のための原理原則を定める必要があった[16]．そこで，2022年6月に「こども基本法」が制定され，憲法や児童の権利に関する条約で規定されている子どもの権利が包括的に定められ，国の基本方針などが示された．

†2）子育て支援については，研究者の視点による違いからさまざま定義がなされてる．柏女[17]は地域における子育ち・子育て支援の活動種類として，①子どもの問題行動や子育てに困難を抱える家族に対する個別的な援助活動，②地域における子どもの育成活動，③多くの親たちを対象とする子育て支援活動をあげ，子育ち支援と子育て支援を区別し，子育て支援に親育ち支援を含めて捉えている．大豆生田[18]は，「子育て支援とは，子育てという営みあるいは養育機能に対し，私的・社会的・公的機能が支援的にかかわることにより，安心して子どもを産み育てる環境をつくるとともに，子どもの健やかな育ちを目的とする営みである」と定義し，子育て支援とは，「親育ち支

援」であり，「子育ち支援」であり，子育ての支え合いを生み出す「まち育て支援」であると広く定義している．本稿では，子育ち支援と子育て支援を区別し，以下のように定義しておく．子育ち支援とは「子どもの主体性とニーズを尊重しつつ，子どもの個性化と社会化を促し，子どものウェルビーイングを保障し，エンパワメントをはかるような社会的支援の総称である」[13]．子育て支援とは「子育てをする親の主体性とニーズを尊重し，親の養育機能を高めるために親としての成長を促し，親のウェルビーイングを保障し，エンパワメントをはかり，同時に地域の養育機能を高めていくような社会的支援の総称である」[13]．

†3）質問紙調査の項目は「児童館・児童センターの先生に相談しますか」である．児童館を利用する子どもたちは，児童館の職員を先生と呼んでいるので質問項目では先生を用いた．本文では児童館の職員と明記する．

文　　献

1）こども家庭庁：こども大綱．
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/f3e5eca9-5081-4bc9-8d64-e7a61d8903d0/276f4f2c/20231222_policies_kodomo-taikou_21.pdf，2023．（2024.2.28確認）

2）こども家庭庁：こどもの居場所づくりに関する指針．
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/816b811a-0bb4-4d2a-a3b4-783445c6cca3/9dade72e/20231201_policies_ibasho_09.pdf，2023.（2024.2.28確認）

3）厚生労働省子ども家庭局長：児童館ガイドラインの改正について（通知）．
https://www.mhlw.go.jp/content/11906000/000361016.pdf，2018．（2024.2.28確認）

4）児童育成研究会（代表：岡本奎六）：コミュニティ施設利用の子どもの人間形成に及ぼす学際的研究（昭和63年度調査研究報告書）．伊藤忠記念財団，東京，1988.

5）児童館の現状と可能性に関する調査研究会：児童館の現状と可能性に関する調査研究（平成9年度（財）こども未来財団委託調査）．全国児童館連合会，東京，1997.

6）八重樫牧子：地域における子どもの遊びや生活に関する調査．厚生の指標，52(10)，7-14，2005.

7）八重樫牧子：児童館を利用している子どもの社会性に関する調査研究．福山市立大学開学記念論集編集委員会編，児童教育学を創る，児島書店，福山，2011.

8）内閣府政策統括官（政府調整担当）：令和3年子供の生活状況調査の分析　報告書．
https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12772297/www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/chousa/r03/pdf-index.html，2022．（2024.5.12確認）

9）厚生労働省子ども家庭局：平成26年度全国家庭児童調査結果の概要．
https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/5zentai.pdf，2019．（2024.3.12確認）

10）住田正樹：子どもは仲間集団によって育つ．日本子ども社会学会編，いま，子ども社会に何がおこっているか，北大路書房，京都，1999.

11）児童健全育成推進財団：児童館論〈児童館ガイドライン準拠テキスト〉．児童健全育成推進財団，東京，2023.

12）児童健全育成推進財団：令和３年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書　児童館の運営及び活動内容等の状況に関する調査研究．https://www.kodomo-next.jp/docs/fact-finding-survey/R3_research_report.pdf，2022．（2024.3.12確認）

13）八重樫牧子：児童館の子育ち・子育て支援―児童館施策の動向と実践評価―．相川書房，東京，2012.

14）八重樫牧子：児童健全育成．八重樫牧子，原葉子，土田美世子編，児童・家庭福祉，弘文堂，東京，2022.

15）所貞之：児童館活動における社会福祉援助技術の可能性―相談活動に関する調査項目分析を中心に―．宝仙学園短期大学紀要，32，45-51，2007.

16）こども基本法プロジェクト：こども基本法について．https://kodomokihonhou.jp/about/，2024．（2024.5.12確認）

17）柏女霊峰：子育て支援と保育者の役割．フレーベル館，東京，2003.

18）大豆生田啓友：支え合い，育ち合いの子育て支援―保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援の実践論―．東京，関東学院大学出版会，2006.

（2024年5月31日受理）

Research on the Sociability of Children using Local Children's Centers: From a Questionnaire Survey on User Evaluation of Children using Children's Centers in City A and City B

Makiko YAEGASHI, Shinji INOUE, Katsuki NAOSHIMA, Toshie MIYSHI and Munetaka IZUMI

（Accepted May 31, 2024）

Key words : children's centers, sociability, user evaluation, questionnaire survey

Abstract

The purpose of this study is to clarify the factors that affect satisfaction and the effects of using children's centers (children's sociability). Furthermore, by clarifying the status of children's consultations at children's centers, we will also consider counseling support. A questionnaire survey was conducted on user evaluations of children (mainly 3rd to 6th graders, 289 children) using children's centers in City A and City B. As a result, similar to the study conducted 15 years ago, this study also found that children who liked playing outside were more cooperative. They also tended to have high levels of creativity and satisfaction. The above reaffirms the importance of outdoor play for children. It has been found that children who frequently come to children's centers often consult with staff and are more cooperative and creative. In the future, there will be a need to enhance counseling support (social work) at children's centers. Regarding regional differences, children in City A used the children's centers more often, but satisfaction and creativity were higher in City B. City A has more children's centers than City B, but anxiety is also higher in City A, so more comprehensive activities such as counseling functions are required.

Correspondence to : Makiko YAEGASHI

Professor Emeritus, Fukuyama City University
1-9-20-1 Tsushima Fukui, Kita-Ward, Okayama, 700-0080, Japan
E-mail：hamanami@po8.oninet.ne.jp
（Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.34, No.1, 2024 35－45）